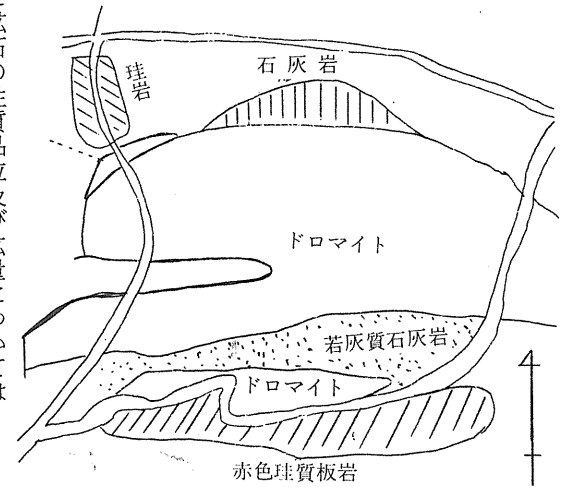


用の山西部1号ドロマイト鉱床群



さらに鉱石の性質品位及び鉱量については

「用の山・川上の両地区はともに鉱石の性質が類似している。すなわち、肉眼的に次のようなものが認められる。

- (1) 灰白く白色でほとんど純粋に近いドロマイト細結晶の集合
- (2) 石英の薄脈が網状に入るもの
- (3) 珪岩とドロマイトが入りみだれて混るもの
- (4) 灰緑く暗赤色の石灰質のドロマイト

台風地帯にあるため、夏季に集中し、年間雨量は一、八五六ミリに達している……以下略」。

河辺村植松は、村の玄関にあたり、役場をはじめ、主な村の機関が集まっている。

この植松の海拔高度が約二〇〇mであり、東端の日其川が海拔高度約七〇〇mである。従って居住地によっては、気温・雨量にかなりの差がみられるのである。

気温・雨量の記録は、年次によって多少の差があるが、ここに代表的な昭和四六年の気温と、降水量の記録(資料)を見ると、(この測定は、地図で見るとほぼ河辺村の中心と思われる大伍小学校の観測である。海拔高度二八〇m)年平均気温が一三度で、一月は平均四度、七月が二六・一度となつてゐる。雨量についてみると、五・六・七・八月と次第に増加しており、冬季の降雨は雪になりやすい。

このように夏には、かなり高温となる一方、一月には最低マイナス六度、二月には最低七度の日がみられる。

前記の降水量を過去にみると、河辺村では内陸部特有の少雨ではなく、かなり多い。昭和四四年には、一・六八二ミリ・同四五年には、一・九〇六ミリ・同四九年には、一・七七三ミリとなつてゐる。これは夏季太平洋沿岸大雨地帯の降雨の越境

(5) 暗色の石灰岩と白く灰色のドロマイトが縞状・斑点状に混じつたもの、などで、(1)〜(5)の順に品質が低下する。それぞれの鉱床において(2)の石英を含む鉱石が最も多く、 $SiO_2$  1〜12% (大部分は2〜5%)を示している。

既知鉱床の推定埋蔵量は、用の山鉱区は約四十万トン (Mg 0.17〜19%、 $SiO_2$  2.5〜6%)・川上地区六十七万トン (Mg 0.15〜19%、 $SiO_2$  0.8〜12%)で、調査によつては、さらに増大する見込みである。」

#### 第四節 気候と天災

##### 気温・雨量

河辺村役場の調査報告書によると、村の気候について、次のように報告している。

「河辺村は四季を通じて晴天の日は南西の風が吹き、夜間は平均摂氏一五・六度で、県都松山と標高の差の割には桜の開花は大体同じである。夏季の日の中の気温は、七月下旬〜八月中旬にかけて、摂氏三〇度の気温を記録するが、夜間の風は涼気を運び摂氏二〇度前後まで下がる。雨量は

河辺村年間気象図 (河辺村大伍小学校観測室)

年 区分 月別	昭和4年				6年			雨量	降雪
	気				温				
	はれ	くもり	雨	雪	最高	最低	平均		
1	15	11	1	1	14.0	-6.0	4.0	121.1	125
2	10	9	3	6	15.5	-7.0	4.3	100.7	347.0
3	18	9	3	1	22.1	-4.2	9.0	113.2	
4	15	14	1		26.7	0.0	13.4	52.1	
5	16	9	6		28.5	2.0	15.3	189.3	
6	6	17	7		29.7	11.0	20.4	263.2	
7	13	16	2		34.0	18.1	26.1	222.4	
8	12	15	4		34.0	17.0	25.5	650.7	
9	15	10	5		32.0	10.0	21.0	122.8	
10	19	10	2		24.0	5.0	14.5	83.2	
11	19	10	1		25.0	1.0	13.0	24.3	
12	21	6	4		15.5	-4.0	5.8	100.7	
計平均	179	136	36	11	34.0	-7.0	13.0	(2,044.3) 170.4	

の影響であると思われる。従つて河辺村の気候を一口に言へば、夏季太平洋沿岸大雨地帯の越境の影響をもつ、内陸盆地型気候といえるだろう。しかし、北平日其川のように海拔高度が七〇〇mの所では、久万高原型に近く、冬季の

冷え込みは厳しく、積雪も多い。

V字型峡谷型の河川に沿った居住地区は、地形的に通風性が悪く、夏には気温の上昇とともに、かなり蒸し暑い。しかし、夜間ともなれば、山間峡谷特有の冷気が漂い、しのぎやすくなる。秋の末から気温の下降とともに、河川に沿った居住地では日照時間が短くなり、旧河辺中学校では、冬季には午前十一時ころにならなければ、グラウンドに日が射さないし、日没も、また早い。

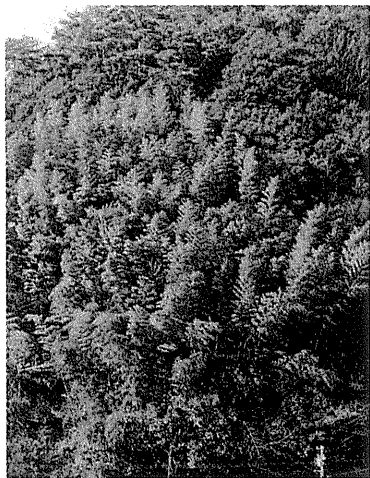
#### 河辺村の天災

河辺村の災害については、最近五か年間の災害状況資料をみると、大体において台風などによる農林業被害が中心で、住宅などに及ぼす被害は、他町村に比して少ないようである。昭和四六年、台風一九号により死者一名を出しているが、ケタはずれの大災害は見られない。

河辺村で特徴的な自然災害といえ、夏季洪水期のおかげによる農地、道路の決壊がある。昭和四七年一〇月の調査によると、河辺村の急傾斜地危険箇所は、一二箇所が挙げられている。

#### 河辺村の地すべり地帯

建設省大洲工事事務所発刊の記録によると、「昭和十八



地すべり地帯

り地帯に指定されている。

こうしてみると、目で見えた河辺村は、至る所の急傾斜面に岩石が露出していて、地盤は強固のように一見、見受けられるが、地質地盤調査の行なわれていない現状では、計り知り難いけれども、地盤は案外、ぜい弱な箇所が多いことがわかる。

#### 台風と農作物の災害

本村での台風の被害は、明治一九年の大暴風雨、昭和二〇年の台風及び大洪水、昭和三六年の室戸台風等があった。これらの被害が本村で大きかった理由として、一つには本村の溪谷が東西に走っていて、直接的には東南風が通路

年七月二十四日には低気圧、不連続線による死傷者一三人・流失家屋五五四戸・全壊家屋三九六戸・田畑流失埋没一六七六・七町歩」とあり、「昭和二十年九月十八日には枕崎台風による死傷者一五二人・流失家屋三八八戸・全壊家屋一六三四戸・田畑流失埋没六九七・四町歩」等とある。昭和一八年のは、長雨と集中豪雨による被害であり、当時の肱川村としての被害程度は、鹿野川の町筋が浸水する程の出水ではなかった。

昭和二〇年九月には雨量も多く(五二四ミリ)、降雨時間も、まる二日間だったので、地盤の水気も飽和状態となつて、各所で崩壊があった。昭和一八年も雨量は五八〇ミリで各所に地すべりを起こしたが、現河辺村地域では、大字山鳥坂・下大成の赤土一帯で、約三m地盤降下・幅二〇〇m、大字植松・松ノ久保で、降下二m・幅八〇m、同日ノ平で幅八〇mほどの崩壊、大字宮谷・上川崎で幅五〇mの崩壊、大字北平・竹ノ瀬で降下一m・幅八〇m、同天神で降下亀裂一m×一・五m・幅一〇〇mにわたつての、地すべりがあった。(河辺村防災基本計画書より)

また、最近になって、大字北平・国木部落で地すべりが生じたし、大字植松・橋詰部落は地盤調査の結果、地すべり化することと、さらにV字型谷形であることである。V字型谷形の場合、山下ろし風がひどくなって、被害が増大する。

部落としては、宮谷・川上・国木等が従来の経験からは被害が大きい、とは、農業共済事務者の言である。

昭和二〇年の場合は、植松部落で二戸全壊したが、これは、ゲジノ尾山よりの下ろし風が当たったと言われる。こうした部落や家には、古来、防風林があったようで、現在も残っているものに、元天神社の境内木(現役場付近の巨木)、富永政男氏宅・橋詰の子供の遊び場の古木等がある。その他の家にも後ろ山に古木があって、防風の役割を果たしていたようである。数十年に一回の備えとして、個人あるいは部落としての防風林、防風樹垣等は、本村の地形上から見直すべき存在である。